OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | ＜文献紹介＞榊原哲也著『フッサール現象学の生成方法の成立と展開』東京大学出版会、2009年 |
| Author(s) | 山口, 弘多郎 |
| Citation | メタフュシカ. 2011, 42, p. 151-157 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/23309 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

**《文献紹介》**
**榊原哲也著**
# 『フッサール現象学の生成　方法の成立と展開』
**東京大学出版会、2009 年**

## 山口弘多郎

**序章**

現象学は、誕生以来常に方法として注目されてきた。けれども現象学とは何かという問題は、メルロー＝ポンティが『知覚の現象学』の序文で書いたように、解決されていない問題である。彼がこのことを指摘したのは､現象学が誕生してから半世紀たったころであるが､『知覚の現象学』からさらに半世紀たった現在でも、状況はあまり変わっていない。

それは、どの現象学者に焦点を当てるのか、それによって現象学の姿が異なるからである。フッサールに注目するのか、ハイデガーをとりあげるのか、あるいはメルロー＝ポンティに着目するのか、サルトルに焦点をあてるのか。現象学者が異なれば現象学は異なる。

こうした状況は、フッサールの現象学がそのまま受け継がれなかったこと。つまり現象学の受容が、批判と転回の歴史であったことを意味している。フッサールの思索に潜んでいる先入見や予見は、例えばフランス現代思想によって、厳しく批判されてきた。

けれども、こうした批判すべてが妥当なものかどうかについては、問題がある。これらの批判すべてがフッサールのテクストを検討したものではないからだ。

この著書は､「フッサール現象学の初期から最晩年にまでわたって､『方法』というテーマに着目し、原典資料の入念な検討に基づく研究を展開することによって、その意味と射程を見極めよう」（序 2 頁）とするフッサール現象学の通史的な研究書である。著者は、この研究をとおして、以上のような批判に対してとるべき態度を見極めようとする。

フッサール現象学は、彼のどの著作に焦点を当てるのかによって、その姿が異なる。『論理学研究』に依拠するのか､『イデーン』を取り上げるのか､『デカルト的省察』に重点を置くのか。

フッサール現象学のこのような転回はどのような理由で起こったのか。この問題に対する考え方つまり現象学観が、この著書最大の特徴である。フッサールが現象学という方法を形成にする

にあたって、どのような態度をとっていたのか。著者は以下のようにまとめている。

> 取り組むべき事象そのもの〈中略〉をまず見つめ、いわば事象そのもののほうから、事象そのものによって予め下図を描かれている方法を後から自覚的に形成していき、まさに事象の解明が進展すると、やはり事象そのもののほうから、それにあわせて方法をも転回・展開させていった。序 4 頁

つまり方法が先にあるのではなく、解明されるべき事象が先にあり、現象学は、それが取り組む事象の本性によってたえず組み立て直されるということである。

したがってこの著作は、このような現象学観に沿って構成され、フッサールがどのような事象と向かい、そのためにどのような方法を自覚したのか、という形で書き進められている。全 3 部で成り立っており、第Ⅰ部「フッサール現象学の誕生と方法の成立」では、フッサールが〈意識の志向性〉という事象を研究するようになるまでの経緯と、そこから進んで、現象学という方法の誕生、主に現象学的還元と本質直観の生成の経緯が詳細に解明されている。第Ⅱ部「静態的現象学から発生的現象学へ」では、フッサールが〈意識の志向性〉という事象から〈純粋自我〉さらには〈習慣性を具えた純粋自我〉という事象へと進むのに応じて、現象学が静態的現象学から発生的現象学へと転回していく過程が、『イデーンⅡ』という未公刊テクストの徹底した検討を通して、記述されている。そして第Ⅲ部「発生的現象学の方法論」では、フッサールにおける新しい現象学的還元の道と時間論の深化の検討をとおして後期の現象学が記述され、最後に現象学の現代的意義が論じられている。本評では、以上の構成に沿って、フッサールが向き合った事象とそれに対応する方法に焦点を当てていきたい。まず〈意識の志向性〉を研究する経緯である。

**第 1 章　第Ⅰ部「フッサール現象学の誕生と方法の成立」**

フッサールが研究生活を数学の研究から始めたことはよく知られている。彼はベルリン大学のヴァイアーシュトラースとクローネッカーのもとで数学を学び、両者から大きな影響をうけた。彼が大学にいた 1880 年代前半は、「数学基礎論」の議論が激しかった時期で、数学の徹底的な基礎づけが目指されていた。彼は、ヴァイアーシュトラースからこの「徹底的主義の精神」を学び、クローネッカーからは数学の基礎に「数える」という心理的作用をおくことを学んでいる。

ここから彼が意識の志向性へと進む決定的なきっかけとなったのは、ブレンターノの記述的心理学である。フッサールは、ウィーン大学で二年間、彼の講義を聴く。ブレンターノは、物理現象と心理現象を対象への志向的関係で区別した。それは、どの心理現象も対象を己自身のうちに含んでいるという関係である。例えば愛においては何かが愛され、憎しみにおいては何かが憎まれている。

フッサールは、クローネッカーからの影響とブレンターノからの影響を総合して、数の起源を「数える」という心理的作用の志向性に置くようになった。このように彼は〈意識の志向性〉という事象に決定的に向かうこととなったのである。

以上のような立場は、心理学主義として『算術の哲学』という彼の処女作の中に表れている。しかしながら、後の『論理学研究』の中で、厳しく批判される。それはフッサールの意味の捉え方が大きく変わったためである。心理学主義では、意味は心理的なものとして捉えられた。なぜなら、心理的作用が志向的に意味と関わっているからである。彼は、この立場から一転して意味のイデア性を承認するようになる。従来、彼のこの転回のきっかけは『算術の哲学』の書評を書いたフレーゲにあると言われてきた。けれども著者は、フレーゲの書評は転回の後押しをするものであったとしても、決定的なきっかけではなかったと述べる。むしろフッサールは、ライプニッツとヒュームの数学的認識の研究を下地とし、ボルツァーノやロッツェ、特にロッツェのプラトニズムから決定的な影響をうけて、意味のイデア性を承認するようになったのだ、と主張する。

意味のイデア性を承認したことで、フッサールは、心理的作用の志向性がイデア的意味を構成するという逆説的な事態にたつことになる。こうした事態から、現象学が誕生するのである。

『論理学研究』から現象学は登場するのであるが、二巻に分けて公刊されたこの著作の副題は、次のようになっていた。第一巻「純粋論理学序説」第二巻「現象学と認識論のための諸研究」。ここで注意されなければならないことは、『論理学研究』の目標が純粋論理学の理念を呈示することだけではなく、その純粋論理学と認識論を基礎づけることにもあるという点である。現象学は、この基礎づけのために要請された方法である。

この二段階の目標が、先の事態と対応する。純粋論理学は意味のイデア性を確保するためにあり、現象学は、確保されたイデア的意味が心理的作用の志向性によって構成される事態を解明するためにある。

それぞれをより詳しく見ると、純粋論理学は「学問的方法論という意味での論理学」であり「すべての諸学についての形式な学」つまり「諸学の学」である。フッサールは、純粋論理学を普遍数学となるべきものとして性格づけ、そこにさまざまな課題を与えている。けれども、彼は純粋論理学の体系的展開は、数学者あるいは論理学者の仕事であり、哲学者の仕事は論理学的な諸概念の起源を探求することにあると考え、純粋論理学から現象学へと進んでゆく。

現象学は、イデア的意味が心理的作用の志向性によって構成される事態を解明する。より正確に言い換えるならば、それは、志向性がイデア的意味を構成しているありさま、つまり志向性の働きを純粋に記述することである。ここで、この「純粋記述」は「諸体験をその実的成素に関してだけ記述的に分析する」ことを意味する。つまり、あらゆる理論的な関心には無頓着に、そうした理論の前段階として体験そのものを記述してゆくことを意味する。こうした純粋記述を行う現象学は、記述心理学として規定された。

フッサールは、〈意識の志向性〉という事象に導かれて、記述心理学としての現象学を彫琢していった。その際、あらゆる理論的な仮定を排除するという「無前提性の原理」を守り、体験そのものを記述しようとした。それは、純粋論理学を基礎づけるためであった。ここにヴァイアーシュトラースから学んだ「徹底的主義の精神」がある。彼は、この後、純粋現象学の立場を確立するときも、晩年になって生活世界の存在論と超越論的現象学を展開するときも、この精神を「あらゆる学問の徹底的基礎づけ」として守り続けた。

今のべたように、『論理学研究』から『イデーンⅠ』の間に、フッサールは、記述的心理学としての現象学から離れ、純粋現象学の立場を確立してゆく。そこでは純粋記述だけではない別の方法も用いられる。しかし、先に述べたようにフッサールの方法は、彼が事象と向き合っている中で、半ば無自覚に彫琢され、その後自覚化されることによって、論じられる類のものである。したがって純粋現象学の方法もまた、その先駆的形態あるいは潜在的遂行が『論理学研究』とその後の未公刊資料の中に見出されうるのである。

著書の中では、現象学的還元と本質直観という二つの方法が『論理学研究』から『イデーン』の間でどのように自覚化されたのかが詳細に解明されている。本評では、前者の現象学的還元がどのように自覚化されたのかを見ていきたい。

現象学的還元の潜在的遂行は『論理学研究』の中に見出される。記述心理学は、「無前提性の原理」を守るために、理論的な前提を排除し、諸体験の実的成素に関してだけを純粋に記述しようとしたのだった。この手続きが、潜在的遂行だったのである。

著者は、1902／03年冬学期の『一般的認識論』講義というテクストの中に、フッサールがこの記述的心理学から離れてゆく萌芽を見出している。それは、純粋記述が記述するものは、「個的な意識の時間的に規定された個別態」としての体験ではなく、経験的自我との関係が捨象された本質としての体験であるという点である。そして1903年の「1895年−99年における論理学関係のドイツ語文献に関する報告」というテクストの中に、フッサールが現象学を記述的心理学から明確に区別する証言を発見している。

1905年夏のゼーフェルト草稿、1906／07年冬学期の『論理学と認識論への序論』講義という二つのテクストの中では、フッサールが現象学固有の立場を確保するために、現象学的還元を方法として使用した痕跡がある。彼は、この中で現象学的還元を、事象を確保する方法として、自我統覚を含むあらゆる経験的統覚、超越化統覚を遮断する手続きと定式化する。

この定式化は、『イデーンⅠ』の現象学的還元とはまだ異なる。そのため、1907年の『現象学の理念』講義と1910／11年冬学期の「現象学の根本諸問題」講義という二つのテクストを考察する必要がある。前者のテクストで注目されることは、あらゆる超越化統覚が「自然的な精神態度」「自然的な思考態度」として概念化されたことである。この態度は、事物や世界の存在を自明とみなす態度を意味している。フッサールによれば、記述的心理学や純粋論理学もまたこの態度から生じる自然的学問とみなされる。そして、後者のテクストにおいて、この態度は「自然的態度」として主題となる。自然的態度は、「われわれすべてがそのうちで生きている態度」として規定され、この本質は「自然の現存在の定立」という定立作用として明らかにされる。自然的態度に対応して、現象学的態度が明確となる。こうして現象学的還元は、自然的態度から現象学的態度への移行の手続きとして定式化される。

このような経緯を通って、現象学的還元は、公刊された著作としては初めて表立って、『イデーンⅠ』において、詳細に論じられた。それは、自然的態度の現象学的態度への徹底的な変更が、「自然的態度のなす一般定立」の遮断として語られる。この一般定立は、「自然の現存在の定立」がさらに明確化されたものである。フッサールは、現象学的還元を経て純粋現象学へと至る道を「還

元の道」と呼び、その必要性を説いた。というのも現象学は、このときすでに心理学ではなく、さらに両者の間には事象的な共通性があるため、現象学の独自性を理解することが難しいからである。

記述的心理学として誕生した現象学は、以上のようなフッサールの自覚化をたどって、純粋現象学として発展した。フッサールは、『イデーンⅠ』で構想したこの現象学的方法に従って、実際に『イデーンⅡ』において、純粋自我の現象学的分析を行う。しかしこの分析は、同時にこの現象学を乗り越え発生的現象学へと展開されるものでもあった。以下では、『イデーンⅡ』というテクストがどのようなものかを確認し、そしてフッサールが純粋自我という事象を承認し、そこから発生的現象学の方法を自覚化してゆく過程を、著者がどのように描写したのかを見ていきたい。

**第２章　第Ⅱ部「静態的現象学から発生的現象学へ」と第Ⅲ部「発生的現象学の方法論」**

著者は、発生的現象学の萌芽を『イデーンⅡ』というテクストの中に見出している。そのためにまず『イデーンⅡ』というテクストがどのように成立したのか、それを明確にしている。このテクストは二つの原稿に分けられる。「1912 年 10 月から 12 月」に書かれた最初の草稿と「1913 年の 3 月か 4 月」に執筆された草稿である。著者は前者を原草稿 A、後者を原草稿 B と呼ぶ。発生的現象学の萌芽は、特に原草稿 A の中に見出される。このテクストは、純粋自我の現象学的分析の途中から始まり、純粋自我と心的自我の関係を考察している。

次にフッサールが〈純粋自我〉という概念を承認する過程を描写している。〈純粋自我〉は『論理学研究』の中では否定されていた概念である。諸体験は、それ自身が諸体験の結合統一であるのだから、諸体験をさらに統合するような原理は必要とされていなかったのである。しかし、そのフッサールが純粋自我を承認するようになったのは「『イデーンⅠ』の鉛筆書き草稿」であると著者は述べる。

そして原草稿 A における純粋自我の現象学的分析を検討する。著者がこの中に発生的現象学の萌芽を見出す理由は、フッサールが純粋自我を「時間的に存在するもの」として記述しているからである。発生的現象学の構想は、「習慣性を具えた純粋自我」への洞察があったからだが、その前段階として、「時間的に存在する純粋自我」は位置づけられるのである。

では、「時間的に存在する純粋自我」が「習慣性を具えた純粋自我」へと発展した要因は何か。著者は、内的時間意識の次元の発見にあると考える。フッサールは、時間意識を作用体験の次元から、それを先反省的に意識している内的意識の次元へと深めた。この次元が内的時間意識の次元であり、〈流れ〉として捉えられた。この流れは、「唯一の意識流」とされ、自らをも構成する最深の次元であると解明される。

時間的に存在する純粋自我の構成が、この意識流の次元において解明されること。それが「習慣性を具えた純粋自我」へと通じている。純粋自我は、この意識流を貫く持続的で同一な自我である。またこの意識流は唯一の時間流である。すると、過去から現在までのすべての作用や体験は、いつでも以前の作用や体験として反省することが可能になる。こうした反復の蓄積から、純

粋自我は自らのうちに習慣性を形成することができるようになる。これが「習慣性を具えた純粋自我」である。

以上のようにフッサールは、自我の発生という問題を「習慣性を具えた純粋自我」の解明として現象学的な記述を行った。これが発生的現象学へとつながる。著者は、フッサールが発生的現象学を方法として自覚したのは、1916 年ないし 1917 年のものとされる草稿からであるとしている。ここで彼は「起源」の問題をとりあげている。彼は価値の統覚と対象の統覚の基づけ関係を時間関係として捉えた。対象の価値を統覚するためには、それ以前に対象を統覚していなければならない。価値を捨象しても対象は残るが、対象を捨象すると価値もなくなる。このことから、価値統覚は対象統覚に基づけられている。彼はこうした時間関係を現象学的発生として捉えたのである。

このように発生的現象学が自覚されると『イデーンⅠ』における純粋現象学は静態的現象学として捉え直される。この静態的現象学は発生的現象学に先行し、発生的現象学の手引きとなる。静態的現象学によって明らかになる統覚の基づけ関係を、発生的現象学は発生の関係として解明するからである。

その発生的現象学の方法の一つが「解体」の方法である。価値と対象の統覚の場合のように一方を捨象してみることによって、どちらが上層でどちらが下層かが明確になる。このような作業が「解体」の方法と呼ばれる。もう一つの方法が、「遡行的問い」の方法である。唯一の意識流という次元に、すべての作用は含まれる。このことは以前の作用が現在の作用に含まれることを意味する。さらにどの作用にも最初の場面があることも意味する。例えば対象の統覚の場合、その対象が初めて統覚された場面へと遡れる。フッサールは、そのような最初の場面を「原創設」と呼び、そこへ遡ることを「遡及的問い」の方法とした。後期を代表する『デカルト的省察』や『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』は、このような方法の成果である。

**結語**

これまで著者によるフッサール現象学の歴史を概観してきた。現象学の誕生から晩年にいたる長い歴史を、『イデーンⅡ』というテクストの徹底した解釈に重心を置きながら、編纂している。このとき、フッサールが向き合った事象とそれに対応する現象学の方法という観点に立っていた。

以上のことから、この著作の利点と限界を把握し、どのような読者に対してどのような意義があるのかを論じたい。自我を軸とした現象学の歴史は、現象学の認識論的な側面を最大限に見せてくれた。これが利点の一つである。けれどもこのことによって、現象学の存在論的な側面がほとんど見えない。フッサールは存在論に対して一定の価値を認めていた。また著者自身も、フッサール現象学が示す地点は認識論と存在論が切り結ぶぎりぎりの地点であると述べているように、現象学と存在論には深い関係がある。これが限界の一つである。

この著作は、現象学への批判を一度棚上げにし、フッサールのテクストに密着している。このためフッサール研究への入門をすませた者に対しては、最高の歴史書となるだろう。しかし専門的な解釈が続くために、現象学を方法として実践しようとする者に対しては、高い壁となりうる。

しかし、最初に述べたように、この著作の特徴は「現象学は向き合う事象に導かれて組み立てられる」という現象学観にある。この現象学に対する見方そのものは、現象学を実践しようとする者に対して充分な意義がある。というのも、「現象学を事象へ応用する」という現象学を固定してしまう考え方から、「向き合う事象によって現象学を組み立てられる」という現象学の可能性を開く考え方へと転回することができるからである。

（やまぐちこうたろう　臨床哲学・博士後期課程）